

©2020年6月

◎第1942回 定期公演 Cプログラム

■ストラヴィンスキー

■ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 (約22分)

ストラヴィンスキーが創作した唯一のヴァイオリン協奏曲は、彼の新古典主義時代(1920～1954)に手掛けられた注目作である。作品は、レオポルト・アウアーとフリッツ・クライスラーに師事したポーランド系アメリカ人ヴァイオリニスト、サミュエル・ドゥシュキン(1891～1976)の依頼で1931年初頭に着手。ストラヴィンスキーは当初、独奏ヴァイオリンの扱い方に自信が持てず、作曲そのものに躊躇(ちゅうちょ)したらしい。しかしヴァイオリンの演奏技術に関するドゥシュキンのアドバイスや、作曲家ヒンデミットの「楽器への先入観を持たないことは、かえって新しい可能性の発見につながるのではないでしょうか」という言葉に励まされ、創作に没頭した。

協奏曲の冒頭、独奏ヴァイオリンが重音奏法で提示する短い不協和音は、ストラヴィンスキーによると「協奏曲へのパスポート」だという。まるでエンブレムのように各楽章の冒頭に現れ、曲の導入を担うこの強烈な和音は、ある日ストラヴィンスキーがドゥシュキンとパリのレストランでランチを楽しんでいた時、ふと思いついたものである。3つの音からなるその和音は音程が非常に幅広く、ヴァイオリンでは演奏不可能に思えた。そこでドゥシュキンは、「これはとても弾けませんよ」とストラヴィンスキーに伝えると、作曲者は一言「残念だ」とつぶやいた。しかしその後ドゥシュキンが帰宅して、ためしに和音を弾いてみたところ、技術的に問題なくそれを奏することができた。ドゥシュキンから即座にその知らせを受けたストラヴィンスキーは、協奏曲への創作意欲を一気にかき立てられたといわれる。

ストラヴィンスキーが新古典主義時代に唱えた「バッハに帰れ」というスローガンは、20世紀前半のクラシック音楽界を先導していく重要な理念になった。このヴァイオリン協奏曲も、各楽章にバロック音楽風の副題が付されている。だがその内実は、バロック音楽へのオマージュというより、過去の偉大な衣を借用しつつも、ストラヴィンスキー独自の鋭い感性に貫かれた「20世紀の協奏曲」へと見事に昇華されている。輝かしいニ長調を基調とする〈トッカータ〉は、ユーモアに満ちたエネルギッシュな楽章。ニ短調の〈アリア

I) は、幅広い跳躍を含む独奏ヴァイオリンのうねるような旋律が印象的。嬰へ短調の〈アリアⅡ〉は、重々しいサラバンド風の雰囲気。華やかなニ長調に回帰する〈カプリッチョ〉は、一転してジャズ風の軽快な曲調。

作曲年代：1931年

初演：1931年10月23日、ドゥシュキンの独奏、作曲家自身の指揮、ベルリン放送交響楽団

(神部 智)